

# モニタリングサイト1000 陸生鳥類調査 情報 2026年 2月号 Vol. 17 No. 2



Anthus hodgsoni

## 結果速報

### モニタリングサイト1000 2025年度繁殖期 一般サイト結果速報 奴賀俊光・森本 元（日本野鳥の会）

全国約1,000ヶ所のモニタリングサイトのうち、森林・草原の一般サイトは約420ヶ所を占める重要な分野です。調査には、多くの市民調査員のみなさまにご協力いただいております。森林・草原の一般サイトでは、概ね5年に1度、陸生鳥類調査（繁殖期および越冬期）および植生概況調査（繁殖期のみを実施）を行っています。2025年度の繁殖期は、調査を87サイト（森林69サイト、草原18サイト）にお願いし、現時点でデータが集まり集計が完了している森林60サイト、草原17サイトの計77サイトのデータを用いて、中間報告いたします。

### 繁殖期に記録された鳥類（2025年度）

2025年度繁殖期調査では、合計143種（森林117種、草原108種）の鳥類が確認されました。これは、昨年度（2024年度）の147種より4種少ない種数でした。2020年度から2025年度までの最近6年間（過去5年+今年）の記録種数（141種～163種）、実施サイト数（77～92サイト）で比べると、今年度の結果は、サイト数では77サイトと最も少なかったのですが（次点は2023年度の78サイト）、種数では過年度までの範囲の中にあり、サイト数の差を考慮すると年変動の範囲内と考えられます。

調査サイト数が多く単年度での比較が可能な森林サイトについて、比較してみます。2025年度（60サイト、117種）は2024年度（65サイト、115種）より5サイト少なく、種数は2種多いという結果でした。昨年よりも5サイトも少ない（最近6年間の中では最も少ないサイト数）のに種数は昨年並であり、サイトあたりの種数が多く感じますが、過去2020年度か

表 1. 2025年度繁殖期の森林サイト(n = 60)の上位10種

a) 出現率			b) 優占度		
順位	種名	出現率	順位	種名	優占度
1	キビタキ	95.0	1	ヒヨドリ	9.32
	シジュウカラ	95.0	2	ウグイス	7.34
3	ウグイス	90.0	3	シジュウカラ	6.49
4	キジバト	85.0	4	ヒガラ	5.71
	ヒヨドリ	85.0	5	キビタキ	5.26
6	コゲラ	83.3	6	ヤマガラ	3.92
7	ハシブトガラス	78.3	7	ハシブトガラス	3.27
8	アオバト	75.0	8	キジバト	3.21
9	ヒガラ	73.3	9	コゲラ	3.10
	ヤマガラ	73.3	10	メジロ	2.86

ら2024年度までの森林サイトでの記録種数は115～138種、サイト数は62～73サイトでしたので、サイトあたりでは過年度と大幅に異なるということではないと考えられます。草原サイトでは、今年度は108種（17サイト）で、2020年度から2024年度までの記録種数は、94～108種（13～19サイト）でした。今年度の記録種数は、最近6年間のうち2020年度及び2023年度と同じであり、過年度のサイト数と同等であるため、森林サイトと同様に大きな変化はないと考えます。

### 出現率と優占度

次に、森林サイト、草原サイトにおける出現率、優占度の上位種を表1、2に示し（出現率：ある種の出現サイト数÷調査サイト数×100、優占度：サイトでのある種の個体数÷総個体数×100を平均したもの）、森林サイトにおける過去6年間の上位種の出現率の変化を図1に示しました。

一般サイトは5年かけて約420サイトを調査します。調査サイトが概ね同じである5年前の2020年度の結果と今年度の結果を比べてみます（表3）。現時点のデータで、森林サイトの出現率9位のヒガラ以外の9種は2020年度も10位以内に入っています。順位は多少異なりますが5年前と種構成

表 2. 2025年度繁殖期の草原サイト(n = 17)の上位10種

a) 出現率			b) 優占度		
順位	種名	出現率	順位	種名	優占度
1	ウグイス	94.1	1	スズメ	8.16
2	キジバト	88.2	2	ツバメ	6.55
3	ハシブトガラス	82.4	3	ムクドリ	5.76
4	ツバメ	76.5	4	ウグイス	5.74
	ハシボソガラス	76.5	5	オオヨシキリ	5.65
	ホオジロ	76.5	6	セッカ	4.80
	ムクドリ	76.5	7	ホオジロ	3.53
8	アオサギ	70.6	8	ヒバリ	3.31
	カワラヒワ	70.6	9	アマツバメ	3.04
10	カルガモ、スズメ、ヒバリ、ヒヨドリ	64.7	10	ホオアカ	2.93

表 3. 2020年度繁殖期の出現率の上位10種

a) 森林(n = 62)			b) 草原(n = 17)		
順位	種名	出現率	順位	種名	出現率
1	ウグイス	93.5	1	ウグイス	100.0
2	シジュウカラ	90.3	2	ホオジロ	88.2
3	ハシブトガラス	88.7	3	アオサギ	82.4
	ヒヨドリ	88.7		キジバト	82.4
5	キビタキ	85.5		ハシブトガラス	82.4
6	キジバト	82.3	6	カワラヒワ	76.5
7	コゲラ	79.0		ハシボソガラス	76.5
8	ヤマガラ	77.4	8	ツバメ	70.6
9	アオバト	74.2		トビ	70.6
10	オオルリ	72.6		ヒバリ	70.6
	メジロ	72.6		ヒヨドリ	70.6

がほぼ同じという結果から、森林環境に大きな変化は無いことがわかります。一方、出現率の経年変化を見ると、ヒガラは変動が大きいのですが、出現率は増加傾向に見えます(図1、太線)。2008年度からの経年変化を見ると(図2)、2010年代前半までは出現率60%弱で安定していましたが、その後、変動しながら増加傾向に見えます。ヒガラは九州以北に留鳥として主に針葉樹林で生息しており、出現率が上がった原因としては、全国的に人工林を含む森林の成熟が進んだことで分布を広げている可能性が考えられます(植田・植村 2021)。これまで、キビタキやアオバトも順位を上げてきており同様の理由だと考えられてきました。特にアオバトは、今年度も8位に位置しており、過去ではランク外の常連であったのが近年では10位以内の常連に変わっています。今後、ヒガラもキビタキやアオバトのように順位を上げ、10位以内の常連となるのか、注視していきたいと思えます。

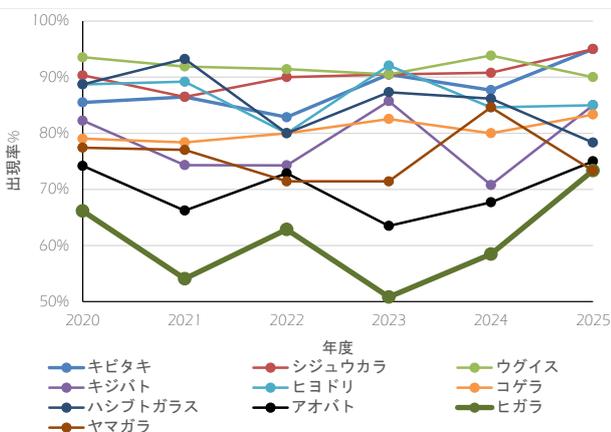


図1. 過去6年間の森林サイトにおける出現率上位種

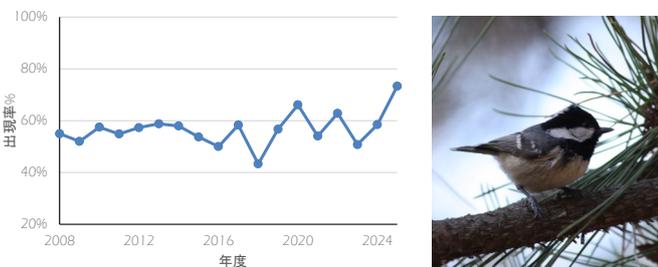


図2. ヒガラの出現率の経年変化

ヒガラ(写真: 奴賀俊光)

## リュウキュウサンショウクイ

今回は、分布が北上しているリュウキュウサンショウクイをとりあげます。日本鳥類目録改訂第8版(日本鳥学会 2024)から、亜種リュウキュウサンショウクイは種リュウキュウサンショウクイになりました。調査員のみなさまには、可能な範囲でサンショウクイとリュウキュウサンショウクイの区別をお願いしているところですが、姿や鳴き声が似ているため、判断がつかない場合はサンショウクイ類と記入をお願いします(環境省自然環境局生物多様性センター 2024)。1970年代頃までは、リュウキュウサンショウクイは、南西諸島や九州に留鳥として生息しており、1990年代にはすでに分布の北上がみられています(三上・植田 2011)。モニ1000でも亜種の頃から可能な範囲でサンショウクイと区別して記録をお願いしていました。そこで、過去からのリュウキュウサンショウクイの出現率の経年変化をまとめました(図3)。出現率は近年増加傾向となっ

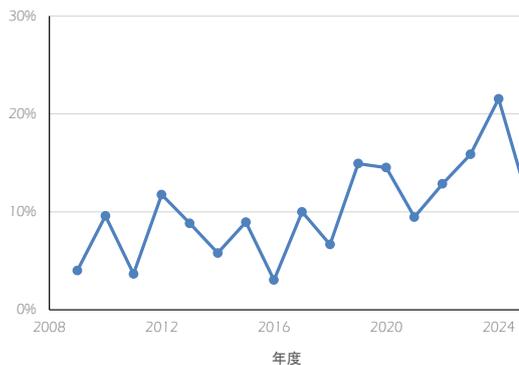


図3. リュウキュウサンショウクイの出現率の経年変化

ています。亜種であったため、過去の記録ではサンショウクイとして記録されているものを区別できないので、過小評価されている可能性もあるとはいえ、モニ1000の第2期(2008~2012)から第3期(2013~2017)は九州、四国での記録だったものが、第4期(2018~2022)には広島県や滋賀県、東京都でも記録されるほど確認範囲が拡大しており、第3期から第4期にかけて分布の北上が進んだと考えられます。三上・植田(2011)では、リュウキュウサンショウクイの生息可能域を推定した結果、関東地方まで生息可能であると推測しています。現在、まさに関東地方にまで北上しており、今後さらに北上するのか、北上が止まるのか、モニ1000の継続調査で動向を見ていきたいと思えます。

## 調査へのご協力ありがとうございました

モニタリングサイト1000の調査継続には、大勢の人々のご協力が欠かせません。引き続き、皆様のお力添えをよろしくお願いたします。

2025年度繁殖期の一般サイト調査には、108名の皆様のご協力をいただきました。最後にお名前を記し、お礼に代えさせていただきます(敬称略、五十音順)。

ホール パトリック、ホール 彪吾、伊藤康史、井上珠紀、宇井文代、瓜生篤、荻原千恵美、加藤正敏、柿本なるみ、甘野静、関忠邦、関川實、岩切久、菊地弘保、吉沢雅宏、吉邨隆資、久高将和、近藤健一郎、近藤朱美、近藤慎一、駒田峰子、榎田一夫、熊谷隼、原口研治、原谷一希、原田修、古巻翔平、古南幸弘、江口初男、溝端紫津子、荒明慎久、高橋和也、高田みちよ、高畑晃、今泉順一、佐久間拓也、佐藤一博、三原学、三宅飛鳥、三宅陸、山本好一、似内功孝、室瀬秋宏、篠原盛雄、柴田俊夫、小椋一博、松永新、松原秀幸、深澤和基、真神参太、杉山時雄、菅原典子、西村四郎、西脇淳浩、石下亜衣紗、川上由希、前村真珠文、前田佑惟、増淵翔太、村上修、多田英行、大槻佳生、大畑祐二、大澤八州男、谷岡仁、谷口真一、端田賢二、中崎悦子、中山正則、中川圭太、猪狩資子、津森宏、津森登志子、塚原和之、田村耕作、渡部通、渡辺政、渡辺正、奴賀俊光、嶋徹、嶋田和明、東條秀徳、湯浅公洋、藤原正貴、藤村光、梅津節雄、白石知代、飯田直己、飛鳥和弘、尾崎高博、富岡千鶴子、武田健、平川由紀子、平田聡子、望月寧那、堀尾岳行、本井拓弥、茂木瑞稀、柳田弘子、柳田和美、有賀正英、林謙治、鈴木正之、鈴木利典、國近誠、櫻井真弓、齋藤匡浩、齋藤修。

引用文献。

環境省自然環境局生物多様性センター. 2024. モニタリングサイト1000 陸生鳥類調査情報. Vol. 15, No. 2. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田市.

三上かつら・植田睦之. 2011. 西日本におけるリュウキュウサンショウクイの分布拡大. Bird Research Vol. 7, pp. A33-A44.

植田睦之・植村慎吾. 2021. 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年. 鳥類繁殖分布調査会, 府中市.

日本鳥学会. 2024. 日本鳥類目録改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

# 結果速報

## 2025年度 コア・準コアサイト鳥類調査 繁殖期結果報告

植村慎吾（バードリサーチ）

### バイオマスの値に長期的な増減はなし

2025年度の繁殖期はコア19サイト、準コア7サイトの計26サイトで調査を行いました。

記録された種数、バイオマスともに例年と比べて大きな変化はありませんでした(表1)。図1は2009年度から2025年度まですべての年で調査が実施されている11サイトについてバイオマスの合計値の経年変化を表したものです。これまでのところ、有意な増減はありません。

表 1. 2009-25年度繁殖期コア/準コアサイトのバイオマス(kg/10ha)

サイト名	バイオマス (kg/10ha)																								
	2009	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25								
足寄	5.3	5.7	5.5	7.7	7.9	13.7	6.4	10.6	6.0	12.1	9.4	10.2	11.1	4.2	7.8	6.7	7.3								
雨龍	10.8	6.3	10.0	3.4	5.0	4.9	13.3	5.6	3.7	7.6	2.0	2.0	2.5	4.7	14.5	3.3									
苫小牧	26.4	21.7	25.9	15.2	23.6	11.6	17.2	19.7	11.3	8.0	7.9	4.5	3.8		14.0	11.8	13.5								
カヌマ沢	6.2	5.8	4.8	7.7	2.1	5.2	7.1	8.2	12.5	7.9	12.8	8.2	7.4	12.0	9.8	8.2	15.5								
大佐渡	8.2	10.1	11.8	13.4	13.5	12.5	8.3	11.8	9.8	7.6	6.2		8.2	9.6	11.1	22.7	23.9								
小佐渡	9.9	17.2	17.0	10.5	15.9	6.7	12.2	9.8	10.7	9.8	10.1		8.3	8.8	12.4	19.7	13.5								
小川	14.7	13.9	15.5	13.4	25.3	11.6	14.7	13.7	13.5	18.9	18.3	14.2	15.3	17.0	14.6	16.3	11.9								
那須高原	6.4	11.7	7.9	11.1	7.6	10.3	6.1	9.0	9.0	9.0	7.4	6.7	9.0	9.9	6.6	5.4	14.9								
秩父	8.4	8.5	5.8	3.2	4.0	6.9	3.5	3.0	2.7	4.7	7.1	6.7	4.3	9.4	6.3	9.0	9.5								
カヤの平	4.2	4.5	5.2	6.9	7.9	7.8	9.0	5.2	4.7	5.5	8.0	7.8	7.0	9.3	7.0	7.4	12.5								
おたの申す平	3.0	2.8	1.3	1.9	1.5	1.0	1.7	1.5	3.2	3.9	7.2	5.6	4.0	4.7	6.4	6.7	4.2								
愛知赤津	8.8	8.1	13.6	9.7	8.9	7.9	8.3	6.5	12.1	3.5	8.3	5.9	6.3	5.0	3.9	4.4	4.3								
戸生	15.7	25.8	8.4	24.4	6.0	11.1	8.6	7.1	4.7	4.7	10.1	3.3	4.7	15.5	3.7	1.7									
上賀茂	25.8	26.9	27.9	23.3	25.0	27.2	24.9	17.7	25.5	19.6	22.2	22.5	28.4	23.2	23.4	12.1	22.8								
和歌山	7.4	5.9	5.2	14.0	8.5	11.5	10.1		5.4	9.6	23.8	8.9	7.5	10.6	10.4	5.7	13.7								
市ノ又	5.6	7.7	5.8	7.8	8.4	5.2	5.0	8.7	9.9	4.0	11.3	8.2	5.5	8.7	13.0	18.7	4.5								
緑	3.9		5.4	4.0	6.5	8.1	1.6	4.2	7.8	5.0	2.7	4.8	6.0	6.9	15.1	7.9	5.2								
田野	7.6		18.3	5.5	5.6	5.6	11.6	9.6	7.6	12.6	11.6	9.9	13.3	5.5	9.1	12.8	12.3								
与那	17.5	22.1	19.8	19.6	14.9	18.7	21.4	19.0	19.7	24.1	25.0	18.9	18.2	24.8	9.8	11.4	25.2								
奄美	24.1	22.5	21.5	14.2	20.6	19.1	22.7	22.7	26.6	17.4	21.4	25.6	16.4	24.6	39.2	39.9									
野幌	27.4				3.3	20.7	27.8	28.3	15.8	12.5	18.8	26.9	17.0	32.9		50.2									
早池峰	5.1					2.6					7.5					5.9									
青葉山	20.0				33.4	41.3	35.7	21.1	46.9	23.0	33.7	40.3	47.2	48.6	41.5	32.8									
函南	12.6					10.9					13.0					23.1									
御岳湯河	3.8					3.3					3.5					3.3									
西表	21.7						24.6					21.4				16.4									

※2017年度の和歌山サイト、2022年度の苫小牧サイトでは1回しか調査を行っておらず、過小評価である。

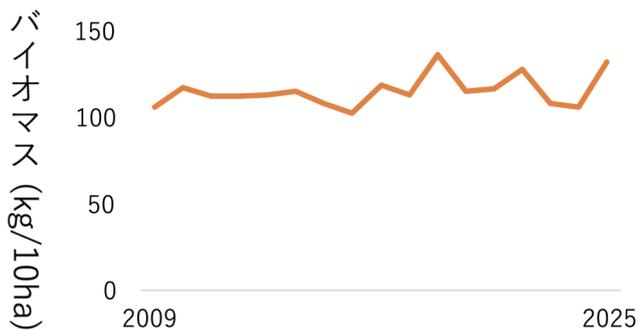


図1. 2009年度から2025年度まですべての年で調査が実施されている11サイトでの、バイオマスの合計値の経年変化

### 高標高地でエゾムシクイとメボソムシクイの記録が増加

標高1700m付近にある長野県のおたの申す平サイトでは、エゾムシクイとメボソムシクイの2種が長期的に増加してきています(図2)。特にエゾムシクイは、2015年までは記録されたりされなかったりしていましたが、それ以降に定着し、その後は個体数が増えてきています。このサイトでは植生の状況などには調査開始時から現在までの間に大きな

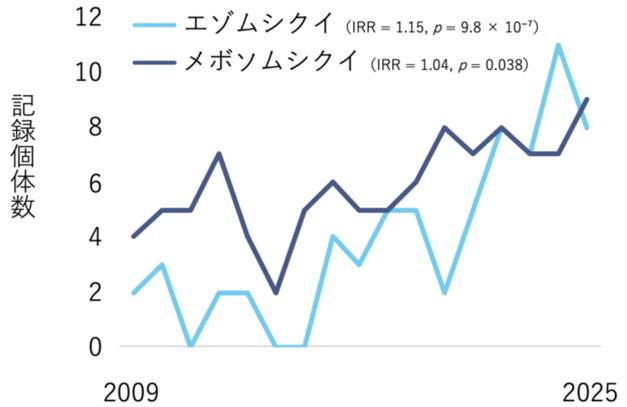


図 2. おたの申す平サイトにおける繁殖期のエゾムシクイとメボソムシクイの記録個体数の経年変化

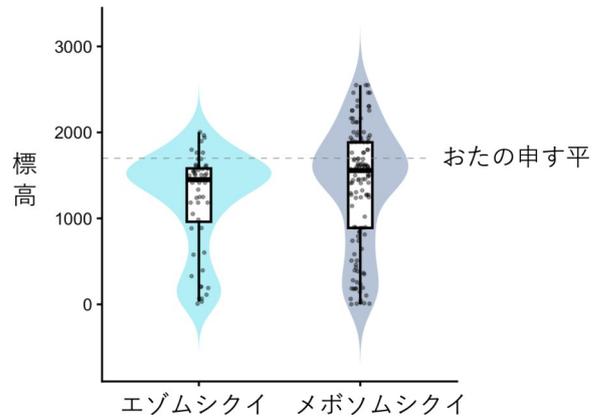


図 3. 全国鳥類繁殖分布調査で記録された、北緯33度から38度の地点におけるエゾムシクイとメボソムシクイの記録地点の標高分布

変化はおきていません。全国鳥類繁殖分布調査の記録をみると、本州中部地域では両種もおたの申す平サイトよりも少し標高の低い場所が標高分布の中心にあります(図3)。気候変動によって、標高がより高い場所にも繁殖分布がひろがったり、個体数が増加してきている可能性があります。



メボソムシクイ(撮影 藤原敦子)

おたの申す平サイトはコアサイトのうちではもっとも年間平均気温が低い冷涼なサイトです。第四期とりまとめ報告書では、亜高山帯性の鳥類が減少傾向にあることや暖温帯性の鳥類が増加傾向にあることを報告しましたが、こうした場所での鳥類相の変化には引き続き注目していきたいと思っています。

### 調査へのご協力ありがとうございました

2025年度繁殖期の現地調査では、石田健、井上伸之、岩本富雄、打和侑菜、江崎逸郎、梶田学、川崎慎二、今野怜、齋藤純子、佐々木務、庄山守、鈴木由清、田中啓達、谷脇智和、中川雄治、中村豊、仁藤悠介、濱田哲暁、堀田昌伸、宮城国太郎、柳田和美、梁瀬桐子、米山富和(敬称略)ほか、多くの方々のご協力をいただきました。皆様に感謝いたします。

**調査者・調査協力員の声**

**淀川中津一般サイト**

**川上由希（箕面ビジターセンター施設管理員）**

モニタリングサイト1000の調査は、一般サイト、コア・準コアサイトともに全国の調査者の皆さんに調査をお願いして実施しています。今回、モニ1000調査に興味があり調査に参加したい（調査員になりたい）という川上さんに、大阪府の一般サイト「淀川中津」の繁殖期調査に参加していただき、2日間の調査体験をした様子を報告していただきました。淀川中津サイトの担当調査員の西脇淳浩さん、ご協力ありがとうございました。

**第1回目調査 5月31日 AM4:50集合**

調査地は大阪市内でドバトやムクドリなど、群れている鳥が多いのが特徴の場所です。早朝とはいえ人も鳥も多い場所です。私が普段探鳥している場所は山なので、環境が大きく違い困惑しました（写真1）。

スポットセンサス調査では、スマホのストップウォッチ機能を使い、1地点2分×5回の調査時間を計測します。西脇さんのスマホでは、次の2分間が始まる前にアナウンスが流れる素晴らしい設定でした。私は記録担当係をしていましたが、一番最初の回は次の2分間に移った事に全く気付かず、間違っって記入するくらい緊張していました。

調査地は、この時期ならではオオヨシキリの声に包まれていましたが（写真2）、それとは対照的に聞きたかったセッカの声が聞こえてきませんでした。調査終了後に探しましたが、セッカの声も姿も見つける事はできませんでした。次回調査日の打ち合わせをした後、解散前に西脇さんがポツリともらった言葉がきになりました。「次回は幼鳥だらげか〜・・・」



写真1. 調査風景。西脇さん(左)、川上さん(右)

**第2回目調査 6月15日 AM4:50集合**

1回目を体験したので少し気持ちにゆとりがりましたが、前回別れ際の西脇さんの言葉「幼鳥だらげ」、正にその通



写真2. オオヨシキリ

りとなりました。1回目の調査には1度だけ確認したハッカチョウでしたが今回は大勢で群れています。しかも全てが幼鳥です（写真3）。ツバメ、ムクドリ、スズメ、、調査地は幼鳥で賑わっていました。50m以内のカウントエリア内にビュンビュンと入ってきます。嬉しかったのは、1回目の調査では声さえ聞こえないという結果に終わったセッカですが2回目でようやく声だけは確認する事ができました。



写真3. ハッカチョウ(幼鳥)

**調査を終えて**

調査地の淀川は、バードリサーチ年報2023年度の表紙写真を飾らせて頂いた土地なのでとても感慨深いものがありました。同行を許可して下さった西脇さんは、私が撮影者という事を認識してくれていたのも、あの写真はこの方角ですよ？というような会話に花が咲いた事も、とても嬉しく楽しい事となりました。2回目の幼鳥だらげはとても楽しかったですが、見極めはやはり難しいですし、数が多い事も大変でした。それでも、「楽しい」「体験できて良かった」が上回る初体験のモニタリング調査でした。今回の体験をして得た経験を、活かせる方向に持っていきたいと思いません。

## オオタカの繁殖成功率や巣立ちヒナ数が低下してきています

守屋年史（バードリサーチ）

### 繁殖情報収集

2017年度に、オオタカは絶滅に瀕した状態から脱したと判断され、種の保存法に基づく「国内希少野生動植物種」の指定から解除されました。解除されたことによって保護が緩むことを懸念して、オオタカの個体数の変化や保護状況の変化をモニタリングする5年間の調査を環境省でたちあげ、情報を収集してきました。現在はその調査も終了していますが、バードリサーチでは日本オオタカネットワークなどと共同で、全国でオオタカを観察している方々の協力を得て繁殖状況のモニタリングを継続しています。



オオタカ(三木敏史)

### これまでの成果

これまでに寄せられた情報をもとに、オオタカの繁殖成功率と巣立ち雛数の推移を調べてみました。

繁殖した巣で、1羽でもヒナが巣立った巣を「繁殖成功」と定義して、繁殖成功率を算出しました。2016年度から集計が終わっている2024年度までの全国における繁殖成功率をみてみると、2018年度以降は75%を下回る程度で横ばいに推移していましたが、2024年度はそこから10%以上低下し、60%を割り込みました(図1)。

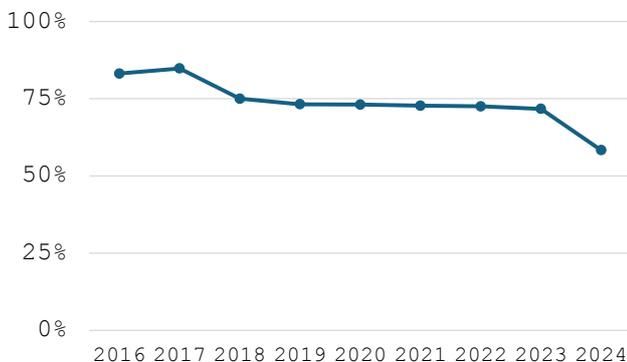


図1. オオタカの繁殖成功率の推移

上のグラフでは、1羽以上巣立った巣を繁殖成功として計算しましたが、繁殖成功した巣の巣立ちヒナ数の割合もみてみました(図2)。繁殖失敗は0羽として表しています。

2024年度は2羽以上巣立った巣の比率もこれまでで最も低い結果でした。

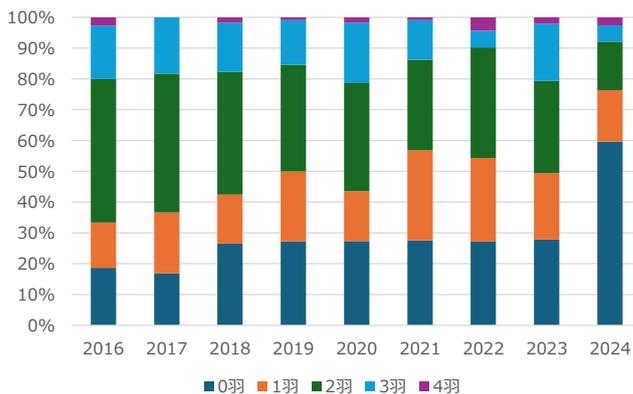


図2 巣立ちヒナ数別の巣の割合

巣立ちヒナ数については、巣ごとの場所の効果を考慮した解析も行いました。9年間の調査で、4年以上の情報がある102巣を対象として解析したものが図3です。調査開始以降継続して繁殖成績は低下傾向にあります。特に2024年度は大きく低下していました。2025年度の結果はまだ全てまとまってはいませんが、予備的な解析では2024年度よりもさらに低下し、状況が悪化している可能性がみえてきています。

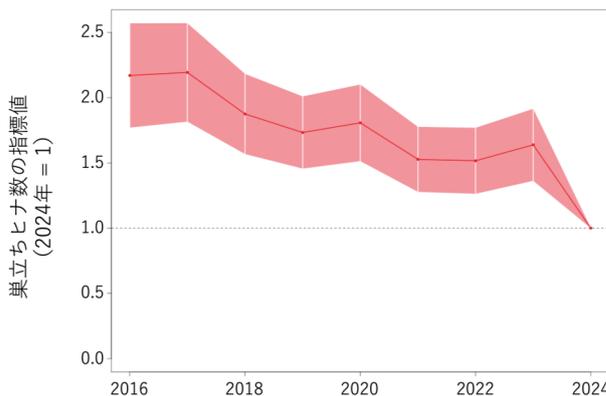


図3. 2024年度を基準とした、巣立ちヒナ数の指標値の傾向

オオタカの繁殖状況が悪化している原因として、ナラ枯れによって営巣木がなくなることや、樹木の伐採によって生息地や周辺環境が劣化していることなどが考えられます。今後は、既存の観察者によるモニタリングに加えて、専門家による繁殖状況調査を実施するなどして、減少の要因を詳細に調べることも必要です。

### 情報収集にご協力ください

この調査は来年度以降も継続します。もし、観察しておられるオオタカの営巣地がありましたら、可能な範囲で継続して観察していただき、情報を教えていただけますと幸いです。登録項目は、営巣地名、場所、営巣場所の環境、営巣林の環境、繁殖成績などです。ご協力よろしくおねがいいたします。

アンケートページ <http://www.bird-research.jp/1/otaka/>

## 事務局からのお知らせ

### モニタリングサイト1000陸生鳥類調査 研修・交流会 レポート

植村慎吾（バードリサーチ）  
奴賀俊光（日本野鳥の会）

モニタリングサイト1000の事業は多くの市民調査員のみなさまのご協力によって運営されています。陸生鳥類調査のデータは2009年からの蓄積があり、今年度は17年目にあたります。このような大規模かつ長期的な事業を継続するには、調査員の確保とモチベーションの維持が欠かせません。陸生鳥類調査では、新しい調査員の確保と調査員同士の交流・情報収集の場となることを目的に、調査研修・交流会を行っています。コロナ禍以降は、オンラインでの開催に切り替えて継続してきましたが、今年度は、オンライン開催に先立って現地開催も久しぶりに再開しました。2つの調査研修・交流会の様子を報告します。

現地開催の調査研修・交流会は10月25、26日（土、日）に長野県の志賀高原で行いました。ここはコアサイトのおたの申す平サイトがある場所で、他にも近くにもう1ヶ所のコアサイト(カヤの平サイト)があるほか、長野県内には複数の一般サイトがあります。1日目がモニタリングサイト1000の概要や調査の成果についての座学講習、2日目を調査サイトでの調査実習を予定していましたが、2日目が雨の予報だったので順番を反対にして1日目に調査実習をしました。参加者は7名でした。研修にはおたの申す平サイト調

査を担当されている堀田昌伸さんに、調査実習、座学とも解説をしていただきました。実際の調査では、1つのサイトに5箇所の調査定点があって、それぞれの定点で10分間の定点調査をします。1日目の実習では2箇所で10分ずつ、参加者全員で一緒に調査をしてみました。天気も良くなく、あまり多くの鳥は出ませんでした。ルリビタキ、ツグミ、カケスなどがちらほら記録されました。50m範囲の感覚のつかみ方や悩んだ場合の対処方法、植生調査の方法などを解説しました。2日目は室内で環境省生物多様性センターからモニタリングサイト1000調査の概要、野鳥の会とバードリサーチからこれまでの成果報告、堀田さんからおたの申す平サイトの概要について紹介しました。また、1日目の夜には希望者で懇親会を行いました。調査講習中には調査精度をあげることに繋がるたくさんの質問があがったほか、今後の調査を引き受けていただける方がいらっしゃったり、調査同行の相談があったりと、主催者側にとっても実りの多いものになりました。

オンライン開催の方は12月7日（日）に、zoomで開催しました。当日は全国の10代から70代以上まで31名の参加がありました。オンラインの研修会では、現地開催の座学講習にあたる内容の後、実際の調査サイトの録音を流しながら一緒に聞き取り調査の練習を行い、その後、各自で10分間の聞き取りをしてみる実習も行いました。

今後も、陸生鳥類調査ではオンラインと現地開催2つの方法で調査研修・交流会を続けていく予定です。ぜひご参加ください。



志賀高原での調査実習の様子



志賀高原での座学の様子

### Facebookページ運用中

調査状況の情報交換を Facebook ページでしています。Facebook のアカウントをお持ちの方はぜひご登録して、調査の様子をお知らせください。

<https://www.facebook.com/groups/548649768498672/>